

湖水こすいの女

鈴木すずき三重吉みえきち

昔むかしウエイルスというところのある山の上に、さびしい湖水こすいがありました。その近くちかのある村に、ギンという若わかものが、母親ははおやと二人で暮くらしておりました。

ある日ギンは、湖水こすいのそばへ牛うしをつれて行って、草を食たべさせておられますと、じきそばの水の中に、知らない若わかい女の人ひとが一人、ふうわりと立たって、金の櫛くしでしずかに髪かみをすいておりました。下にはその顔かおが、鏡かがみにうつしたように、くつきりと水にうつっておりました。

それを見ると、その女の人は、それは何なんともいいようのない、やさしい美うつくしい女むすめでした。

ギンはしばらくじっと立たって見ておりました。そのうちに、何なんだか、自分の持もっている、大麥おおむぎでこしらえたパンとチーズを、その女の人ひとにやりたくなくなりました。そして、そつと岸きしへ下くだりていきました。

女むすめは間まもなく、髪かみをすいてしまつて、すらすらとこちらへ歩あるいてきました。ギンは黙だまつてパンとチーズをさしだしました。

女むすめはそれを見ると首くびをふつて、

「かさかさのパンを持もつた人ひとよ。私わたしはめつたにつかまりはしませんよ。」
こういって、いきなり、すらりと水の下へもぐつてしまいました。